

たじひのだより

松原市文化財情報誌 No.4



発掘調査でわかった昔の景色

はじめに

考古学と物理や化学などの自然科学、まったく関連のないように思えるこの2つの学問分野ですが、実は親密な関係があります。この2つの学問分野が交わった新たな学問を“文化財科学”と言います。文化財科学と一言で言ってもその内容にはものすごい広がりがあります。具体的にどんなことをするのかというと、「〇〇時代の景色は？」、「この地層はいつできたの？」、「その場所でお米が作られたのはいつから？」、「この木は何の木？」、「この土器はどこ

で作られたの？」とかいう疑問に答えることから、「遺跡から出てきた木製品や金属製品を傷まないように取っておこう」というようなことまで、書ききれないほど多くのことが含まれています。

今回は、その文化財科学の分野でご協力いただいていた川崎地質株式会社微化石分析所の渡邊正巳さんをお願いして、発掘調査でわかった松原市の昔の景色についてご紹介したいと思います。



昔の景色を描くには…？

発掘調査では、ここに建物があつたとか、溝があつたとか、道があつたとかいうことが、その痕跡(遺構)を見つけることでわかります。また土器や木製品が出土することで昔の人が使っていた道具類がわかります。ではこれだけで昔の景色が描けるのでしょうか？ それらしい絵が簡単に描けるような気がしますが、よく考えてみると木や草花など身近な植物を描くことが出来ません。でもそこに本当に生えていた木々や草花を調べて描く方法が文化財科

学にはあります。皆さんの足下、地面の中から花粉を探し出して、昔に生えていた木や草花を調べる“花粉分析”という手法がその方法です。また“プラントオパール”というものを探す分析方法もあります。

「花粉…？」そう、花粉症とかで聞くことの多いあの花粉です。花粉は大変壊れにくい物質からできており、意外なことに地中に埋まったままで何十年も何百年も、場合によっては何億年も壊れずにいます。



昔の景色は…？

縄文時代以降の大阪平野南部における木々や草花の生育の状況の変化は、大まかには八尾市の志紀遺跡や藤井寺市の西大井遺跡で行われた花粉分析によって知ることができます。

①縄文時代後期(西暦紀元前1500年～1000年頃)以前

カシ類やシイ類の花粉が多量に見られることから、平野部から丘陵部、生駒山や金



▲カシ類の花粉
(横棒=0.01mm)

剛山・葛城山などの山地部までカシ類やシイ類の繁る森林（照葉樹林）でおおわれていたと考えられます。

②縄文時代晩期（西暦紀元前1000年～300年頃）

スギの花粉の量が増えます。気候がやや涼しくなってスギが目立つようになったと考えられます。

③弥生時代（西暦紀元前300年～紀元後300年頃）

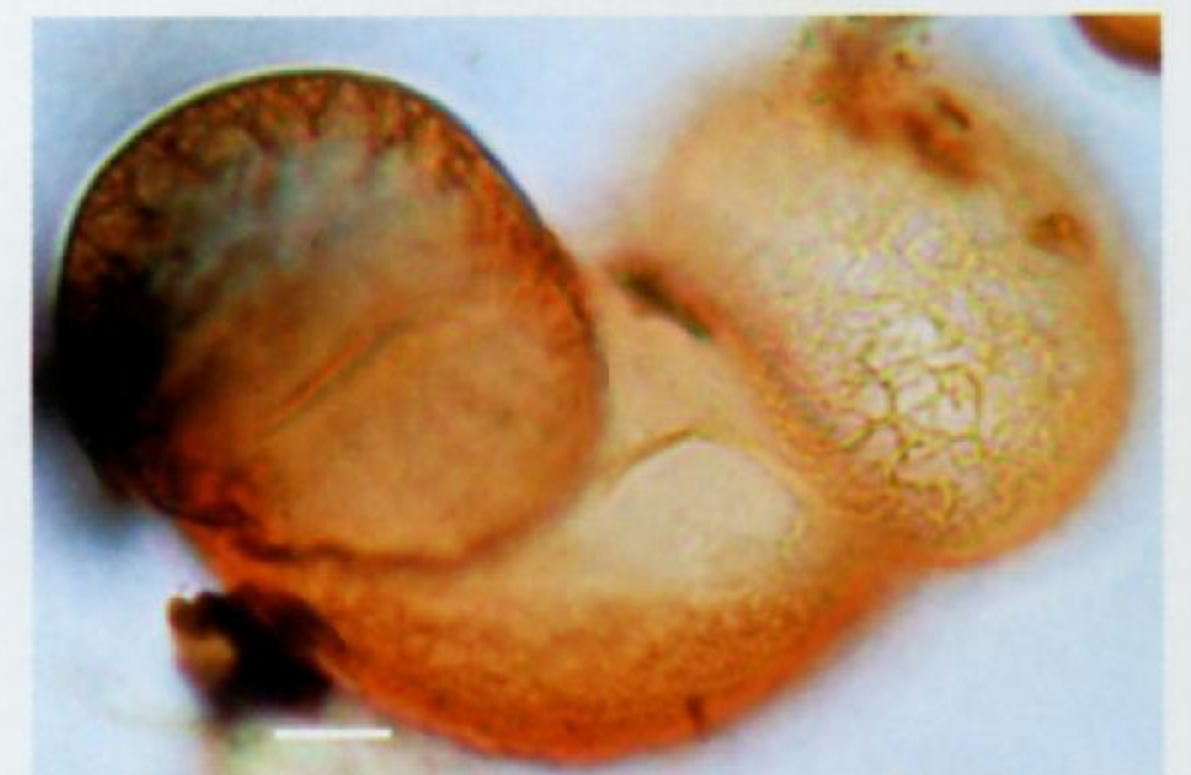
イネ類の花粉の量が急増し、低湿地での水田開発が始まったことがわかります。

④古墳時代（西暦300年～700年頃）

マツ類の花粉の量が急増します。自然にあった照葉樹林が里山や薪炭林といった人が管理するマツ類の森に変化していくようです。

⑤室町時代の終わり頃

ほとんどの照葉樹林は里山や薪炭林にかわってしまいました。
なお現在私たちが見ることのできる森林の姿は、ほとんどが明治時代以降、特に昭和20年（1945）代以降に植林されて形成されたものです。



▲スギ(上)とマツ類(下)の花粉
(横棒=0.01mm)



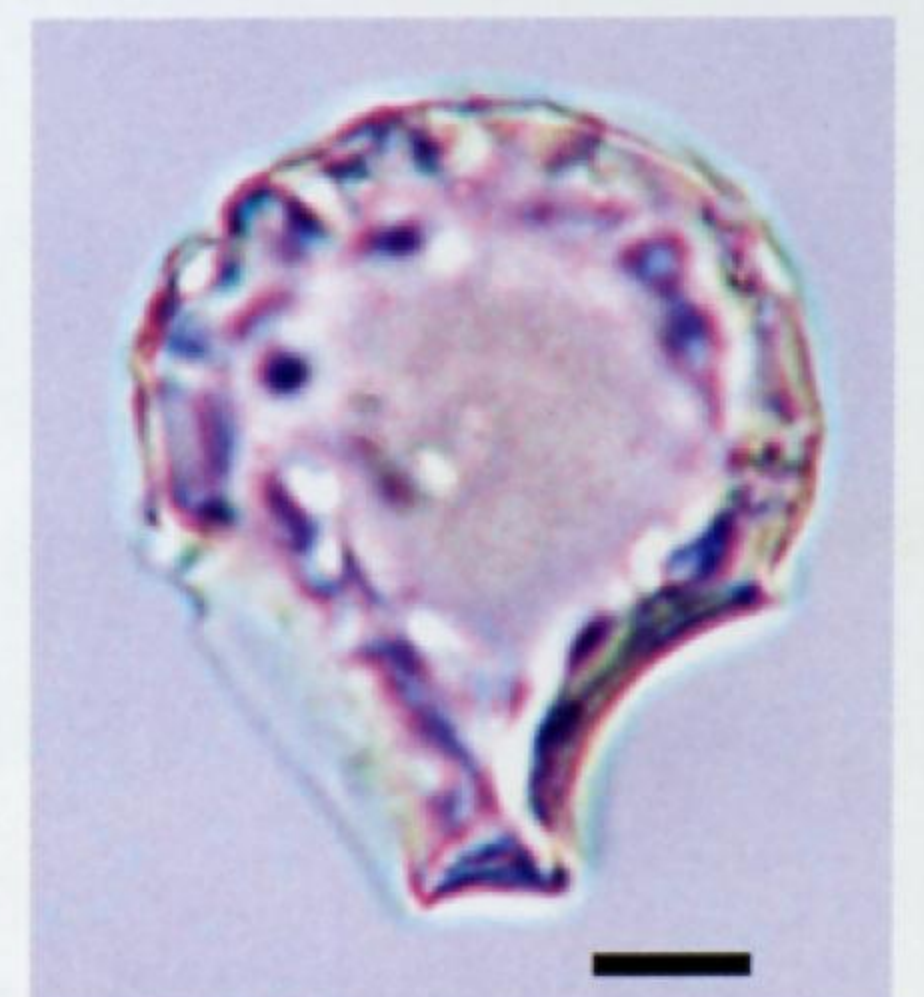
松原市の昔の景色は…？

それではもっと具体的に松原市域ではどのような景色だったのでしょうか？ 松原市は、大阪平野の南端、泉北丘陵の北端に位置していて、高い山などはありませんし、低湿地であったと考えられる場所もそれほど多くはありません。低湿地で生駒山地に近い志紀遺跡や西大井遺跡とはちょっと様子が違うように思えます。

松原市内の発掘調査で行った花粉分析からは、市内特有の景色が明らかになってきています。市域のほぼ中央部に位置する上田町遺跡で行った花粉分析では、古墳時代から中世頃までの間に志紀遺跡や西大井遺跡ではマツ類の花粉が増えるのに比べてマツ類の花粉量が増えることはなく、代わりにカシ類の花粉がほとんどを占めていました。また上田町遺跡以外の市内の遺跡でも同様な分析結果が出ているところがありますので、中世以前の松原市域の景色は、カシの林が点在している風景が推定されます。おかしな話ですが、中世以前の松原は、“マツ原”ではなく“カシ原”だったようです。当然、カシの林だけがあったわけではなく、水田も見られました。おそらく水田とカシの林、住居などがモザイク状に散らばっていたのではないのでしょうか？ 発掘調査で水田跡の遺構を発見することはたいへん難しい事ですが、上田町遺跡では弥生時代後期（西暦200年～300年頃）の水田跡の遺構が発見されていて、当時の水田風景が明らかになっています。水田跡の遺構を発見する以外に遺跡に水田があったかどうかは、花粉分析でイネの仲間花粉を探すことでもある程度わ

かりますが、プラントオパールを探すことで、より一層明確になります。プラントオパールとは、植物の細胞内部でできる珪酸体で、その形状から植物を特定することができるものがあります。また花粉と同じように地中に埋まったままで長い間壊れずに残ります。イネの葉っぱの中でできたプラント・オパールは、そのほかのすべての種類のプラント・オパールとは区別され、イネの葉っぱの中でできたことが特定できます。つまりこのプラント・オパールを見つけることでそこにイネが生えていたことがわかります。イネはいうまでもなく“お米”です。ということは、“イネが生えていたところ” = “水田”ということになります。東新町遺跡では、古墳時代前期（西暦300年～400年頃）の地層からイネのプラントオパールを探し出しました。これによって東新町遺跡付近では、古墳時代前期には、すでに水田が作られていたことが証明されました。きっと水田の近くにはムラもあったことでしょう。

カシの林と水田風景、そしてその間に垣間見る村々の茅葺や板葺き屋根の家並み…。古代の風景をちょっと想像してみてください。



▲イネのプラントオパール
(横棒=0.01mm)

発掘調査
レポート①

清堂遺跡 (せいどういせき)

岡1丁目地内で、古墳時代後期に埋まった河川跡とそこに流れ込む小溝跡、そしてこの河川などが埋没した後に建てられた掘立柱建物跡を発見しました。河川からは、古墳時代中期から後期の土師器の高杯や甕、須恵器の杯・高杯・大甕などが出土したほか、円筒埴輪の一部が出土したことには注目されます。近隣に今はなき古墳があったのではないのでしょうか。



▲河川跡と掘立柱建物跡

発掘調査
レポート②

立部遺跡 (たつべいせき)

立部遺跡から豪族の居館あるいは官衙（役所）跡と考えられる飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物跡、奈良時代に廃棄された井戸跡などが発見されました。掘立柱建物跡の詳細は、整理中のため明らかではありませんが、柱跡は一辺約1mと比較的規模が大きいものです。また建物自体も建替が行われたことが伺えます。建物跡から約30m南で検出した井戸跡は、径3.2m、深さは約1.5mと浅く、井戸枠などの痕跡も認められませんでした。井戸内からは、埋没時に遺棄された奈良時代の土師器皿・鉢、須恵器杯などのほか製塩土器が出土していることが注目されます。今回の調査地は、柴垣2丁目地内に所在し、立部遺跡内ではやや北よりに位置します。これまでの周辺の調査では、古墳跡や奈良時代以降の遺構などが発見されています。しかし飛鳥時代の遺構の発見例は少なく、平成2年（1990）に本市で調査した大塚青少年運動広場での墓跡などのみです。今後、発見された大型の掘立柱建物跡が飛鳥時代にまで遡ることが明らかになれば飛鳥時代の当地域における居住域と墓域を考える上での貴重な成果となるでしょう。



▲井戸跡

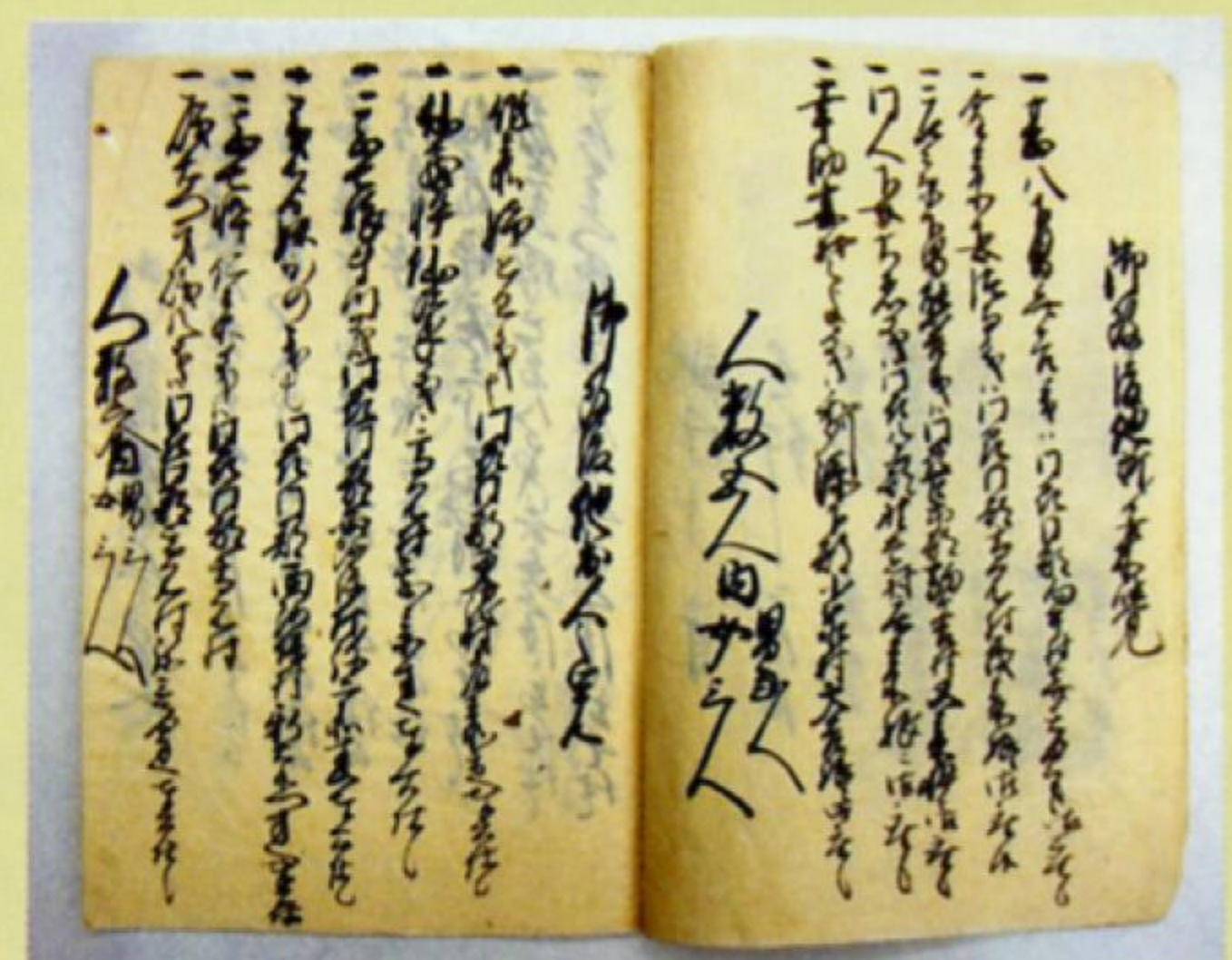


▲掘立柱建物跡

市史編さんレポート

諸宗門人別奥ノ帳 (しょしゅうもんになべつおくじめちょう)

江戸時代、村々は毎年3月、宗門改の際、「宗門人別改帳」を領主に提出しなくてはなりませんでした。譜代大名秋元氏領だった東代村では、「宗門人別改帳」「高持名前五人組帳」「諸宗門人別奥ノ帳」の3冊セットで提出しました。写真は文政12年（1829）の「諸宗門人別奥ノ帳」です。この帳面には、戸数・総人数をはじめ、「御改後他所より来覚」（転入、写真右頁）、「御改後他出人之覚」（転出、写真左頁）、「御改後出生人之覚」（出生）、「御改後死去人之覚」（死亡）、「牛数之覚」（牛の数）が書かれています。写真右頁には、結婚・奉公といった理由で、近隣村のほか駒ヶ谷村（現羽曳野市）や大和国添下郡小泉村（現奈良県大和郡山市）から転入したことが記されています。このように、「御改後他所より来覚」「御改後他出人之覚」を見ると、当時の人々が村以外の世界ともつながりを持っていたことがわかります。



▲山田典生氏所蔵文書

文化財 体験 学習会

『古代人になってみよう』

今年も昨年に引き続き、9月4日から3回にわたって行いました松原市文化情報振興事業団・公民館共催事業体験学習会です。今年は昨年も好評だった「土器の復元を体験してみよう」、「古代米をたべてみよう」の企画のほかに、「土笛をつくってみよう」ということで、粘土をこねて自分たちで土笛をつくってみました。古代の人たちが奏でた音色はどんな音色だったのかなあと思いを馳せながら、みなさん楽しいひと時を過ごしました。また土器の復元では、土器の破片が目の前で、自分たちの手で形を成していくのにはみんな興味津々です。普段さわることのできない本物の古代の土器も迫力あるものでした。古代米は、赤米と黒米を焚き火で、古代の土器を模した甕で炊いてみました。普段食べているお米とはずいぶんと違いましたが、みなさん完食したようです。参加されたみなさん、古代人になれましたか？



歴史講演会『まったら塾』開催

今年も、まったら塾も2年目です。今回は、江戸時代の松原をテーマに市域内外から講師を招いて行われました。地域教育振興課市史文化財係では、第1回「江戸時代の村に生きる人々の暮らし」と題して、江戸時代の歴史書に載らない普通の民衆の生活を、旧家に残る古文書から読み解く試みをご紹介しました。江戸時代の松原・東代村を取り上げ、厳しい飢饉に苦しみながら生きてきた江戸時代の人々の生活や結婚や離婚といった人々の交流など、著名人ではない普通の民衆の生活がどのようなものであったのかここでよみがえらせました。



あ と が き

今回は、花粉分析などからわかる松原市の自然環境の移り変わりや、昔の人の暮らしとの関係について取り上げてみました。一見何の特徴もないような土や出土資料から、たくさんの新しい事実が発見されるようになってきています。これからの調査がますます期待できそうです。

◎松原市内の文化財についてお知りになりたい方へ◎

松原市内の各遺跡から出土した遺物のほか古文書や民俗資料などの文化財の一部は、ふるさとびあプラザ1F郷土資料館において展示しています。ぜひご見学ください。またホームページも開設していますので、そちらのほうもぜひご覧ください。

ホームページアドレス：<http://www.city.matsubara.osaka.jp/ky-syakai/bunkazai/toppage/sisi-index.html>
その他ご不明の点は、下記各事務所までお気軽にお問い合わせください。

○埋蔵文化財に関する手続き・調査、文化財の指定・登録、その他一般 【阿保事務所】

大阪府松原市阿保5丁目21番8号

電話 072-336-4448 FAX 072-336-4001

○松原市史の編さん、松原市史・市史資料集等の販売、古文書・社寺・古民家等の調査 【市史編さん事務所】

大阪府松原市上田7丁目11番19号 ふるさとびあプラザ2F 電話・FAX 072-336-6224

○発掘届出・遺跡範囲確認・建築確認申請時の合議などの受付窓口 【本庁5F・教育委員会地域教育振興課】

大阪府松原市阿保1丁目1番1号

電話 072-334-1550(代) FAX 072-332-7720

※なおふるさとびあプラザ1F郷土資料館につきましては下記へお問い合わせください。

(財団法人松原市文化情報振興事業団) 大阪府松原市上田7丁目11番19号 電話 072-336-6800

(本庁5F・総務部人権文化室) 大阪府松原市阿保1丁目1番1号 電話 072-334-1550(代)